

■ 論 説

■ 介護人材不足・人材確保について

—グループホームで働くという視点から—

有限会社ハヤカワプランニング / 代表取締役 早川 浩士

■ 暮らすこと

自宅から通勤しているという若手の介護職はいないでしょうか。当然，子ども部屋または勉強部屋とよんでいた自分の部屋があり，そこから仕事場へ通ってきます。

朝夕の食事，お誕生日会，クリスマスパーティーなど，家族団らんのひとときを過ごした幼児期の経験をもつ人も少なくないでしょう。ところが小学校高学年にもなると，塾通いから，親子で食卓を囲む機会さえなくなります。

受験に必要な教科の得点が高いと親や教師から“よい子”であると誉められ，偏差値が高くなるほどよい学校への進学が期待されます。

勉強ができれば“よい子”なのです。

生活インフラが未発達で，水道もなく電気やガスなどが整備されていなかったころ，朝起きるとともに，布団の片づけや，井戸や川から水を汲んだり，雑巾がけをしたり，かまどに火をおこすための薪を準備や配膳の手伝いなど，子どもの役割（仕事）が待ち構えていました。新聞，牛乳配達などにでかけて一家の家計を支える子どももいました。

子どもには，家庭のなかで果たすべき家事の分担という役割が決められ，これを手伝うのが“よい子”であり“親孝行な子”でした。

昭和33年の春ごろの東京を描いた映画「ALWAYS 三丁目の夕日」には，集団就職で上京した六子ちゃんが就職した自動車修理工場兼自宅には，テレビや冷蔵庫などの家電製品が次々と押し寄せるといった暮らしぶり。トイレも台所もない下宿同然の部屋住み生活ですが，郷里とは雲泥の差のある東京暮らしだったに違いありません。この世代，実家に給料の一部を送金しながら，夜学に通って准看護師などになった人も少なくないでしょう。

タイムスリップするような話を切りだしたのは，家庭の暮らし方と家族の役割が，時代が進むにつれて変わってきたことをお伝えするためです。

その影響は，子どもに対しての“よい子”の物差しをも狂わせてしまったといっ
てよいでしょう。偏差値教育の是非を論ずるわけではありませんが，介護人材の将来を見つめるうえでもみすごすことができないと考えています。

介護職には、実家や自宅の炊事、洗濯、掃除(自室、台所、お風呂、廊下、玄関、庭)、買い物など、親がすべて肩代わりをしてきたので、家では一切したことがないという人がいます。ホームに勤めてからも、家での家事は何も手伝わず、ただひたすら寝るだけ。「人間としての尊厳を失わずに暮らしていけるようなケアを提供する」など、理念を口にする介護職の暮らしが、実はその家族によって支えられていることが散見されます。

■ 働くこと

働くとは、①動くこと、②作用すること、③効果を現すこと、④精をだして仕事をすること、⑤他人のために奔走すること、などの意味があります。

大事なことは、“働くこと”と“お金を稼ぐこと”が、必ずしも同一ではないということ です。

この代表例には、専業主婦とよばれた母親の働きがあります。

日課は、炊事、洗濯、掃除、買い物、育児・教育、ご近所づきあいなどなど。しかも、年中無休の仕事です。この無償労働(アンペイドワーク)の対価は、月給に換算すればいくらになるか?との議論が交わされた時代もありました。

「人は、誰のために働くのか?」

「自分のために働く!」

これが、昨今の風潮です。次の文章はあるホームの玄関に貼ってあった標語です。

「はきものをそろえる
はきものをそろえるところもそろろう
心がそろうとはきものがそろろう
ぬぐときそろえておくと
はくときに心がみだれない
だれかがみだしておいたら
だまってそろえておいてあげよう
そうすればきっと
世界中の人の心もそろうでしょう」

これも“働くこと”に違いありません。

■ 介護職のあるべき姿

ホームでは、入居者と“暮らすこと”、“働くこと”を真摯に理解しなければ、共

同生活介護の維持・存続はこの先むずかしくなるのではないのでしょうか。

“暮らすこと”，“働くこと”が分かるから，分からない世代へと，確実に介護職の世代交代が進んでいます。

介護人材不足は，少子化，大学全入，雇用拡大などから人材難に陥っているという表層面のみをとらえてはいけません。仮に不景気になり，介護業界の雇用環境が好転したとしても，“暮らすこと”，“働くこと”の本質に介護職が入居者との間に轍のある限り，この穴埋めは容易なことではないでしょう。

顧客満足 (customer satisfaction) と従業員満足 (Employee Satisfaction) とは，一対であるという考え方，「CS=ES」がありますが，これに基づけば，ホームの入居者と介護職は，共に満足を共有しなければならないことになります。

サービスの密度が濃くなるにつれ，余裕のない職員配置では，1人ひとりに強い恒常的な不規則勤務の体制は身体的にもきつく，体調不良を訴える遠因ともなっており，定着率を引き下げる危険性が高くなります。

ホームでの認知症ケアのかかわりは，専業主婦が家庭で当たり前に行ってきた“働くこと”と“暮らすこと”が内在されていることがあります。ときとして，パートのおばちゃんが正規の介護職員よりも戦力であると認められる由縁がここにあります。

旧世紀を生きてきた入居者を支えるには，時代錯誤と中傷されようとも，住み込み体験を通じた共同生活介護の理解は不可避であると考えます。

六子ちゃんの時代は，職住一体の環境下で働きながら暮らし続けるという生活がありました。

車の免許がなくとも生活や仕事に支障のない人もいれば，必要なため教習所に通わざるを得ない人もいます。在宅サービスが，家庭的な雰囲気や暮らしを支える視点を大切にす限り，車の免許必携と同等な暮らし方のライセンスをプラットフォームに据えた介護職のあるべき姿を希求しなければ，ケアの質は高まるどころか形骸化しかねません。

ためしに「家族団らん」について，グループワークの実施やレポートを行ってみるとよいでしょう。家族団らんのイメージさえおぼつかない介護職がいたとしたら，家庭的な雰囲気など絵空事となってしまうのではないのでしょうか。

介護職は，有資格者としての専門性の追求と同時に，人格の形成を養い感性を磨くこと，つまり，人として高みを目指すことが重要です。

介護職の世代交代，後継者育成も待たなし。「介護人材不足・人材確保について」という編集部からのタイトルに答えるべく，限られた紙面に一石を投じてみましたが，さていかが。